北海道当別町 140年を祝って
伊達武者行列が 参陣

大崎市の姉妹都市「当別町」は、開拓が始まって今年で百四十年となり、先人の偉業を称え、さまざまな記念式典が催されています。十月九日から十一日に、大崎市から市民親善訪問団三十人が当別町を訪れ、姉妹都市パレードなどの記念式典に参加し、当別町の歴史に触れながら交流を深めてきました。

問 観光交流課 ☎㉓7097

開拓の足跡をたどって

十月九日、訪問団一行は最初に、石狩市の聚富（シブ）を訪れ、開拓を記念して建立された「北海道移住の地」の碑に献花しました。ここは、百四十年前、伊達邦直公主従が最初に入植し開拓を試みた地です。

当別町に入り、伊達邦直公がまつられている当別神社を参拝しました。社殿には、四十年前、開拓百年を記念し再建する際、岩出山から運ばれた木材も使われています。

百四十年を祝い 姉妹都市パレード

翌十日、前日からの雨が開始直前に上がり、予定どおりパレードが始まりました。

姉妹都市パレードは、当別町と姉妹都市を結んでいる三市の市民と当別町民合わせて五百五十人が、町の目抜き通り約八百メートルの区間をパレードしました。

当別町と景観がとても似ていることなどから姉妹都市となっているスウェーデン王国レクサンド市は民族衣装で、伊達家が縁となっている愛媛県宇和島市からは、宇和島の祭りのシンボルとして有名な牛鬼が練り歩きました。

大崎市は政宗公まつりの伊達武者行列で参加し、甲冑（かっちゅう）武者、陣羽織、袿（かけ）姿に、沿道に集まった町民から、熱烈な声援を受けました。

さらに、大崎市からパレードに参加するために駆けつけた、政宗公まつり実行委員会の有志の面々、地場産品販売のため「あ・ら・伊達な道の駅」の関係者も記念事業を盛り上げました。

過去から未来へ 深まる絆

当別町と大崎市は、旧岩出山町から含めて、姉妹都市盟約締結十周年に当たります。

今回の市民親善訪問団の結成は、大崎市として初めてで、岩出山地域に限らず広く市民の参加を募りました。

多くの大崎市民が姉妹都市の人々と交流し、慶事を共に喜び、歴史的なつながりに触れることで、更なる絆を深めることができました。

宇和島市の牛鬼の迫力に歓声が上がります

民族衣装で参加したレクサンド市の皆さん

団員の安倍 優さんは、神社建設用の材木の搬出に関わった思い出があります

「北海道移住の地」の碑に献花する三神市議会議長、伊藤市長、遠藤団長（右から）

パレードに参加した大崎市民親善訪問団の皆さん

大崎の先人が渡った当別町百四十年の歩み

明治維新の際、仙台藩は近隣諸藩と同盟を結んで新政府軍と対抗しますが、結局敗れてしまいます。禄高は、六十二万石から二十八万石に減らされ、岩出山伊達家も一万四千石から六十五石に減らされてしまいました。このままでは家臣を養えないと考えた岩出山伊達家の十代当主伊達邦直公は、私財を投じて北海道移住を決断し、新政府に開拓を願い出ます。

新政府にとって北海道開拓は、諸外国からの侵略を防ぎ、はっきり日本の領土であることを示すために、たくさんの人を定住させる必要があり、重要な意味を持っていました。

明治四年三月、邦直公主従は故郷を後にし、翌四月には、新政府から与えられた聚富に入植し、開拓が始まりました。

しかし、聚富は日本海沿岸の砂地で、潮風にさらされた地には作物ひとつ実らず、やむなく聚富をあきらめ、新たな新天地を求めて調査に乗り出します。

原生林の中を進み、ついに当別川の両岸に肥よくな土地が広がっていることを発見。やっとの思いで理想の地を得るのです。

それからも、苦難の歴史が刻まれ、人々の開拓の努力は、明治三十五年ごろには札幌支庁管内（当時）で最も豊かな農村へと発展し、農業を基幹産業とした町の礎が築かれました。

現在では、管内有数の米の生産量を誇り、切り花の生産額が盛んで、道内屈指の生産額となっています。

また、札幌市や江別市という産業集積地の隣地であり、石狩湾新港と新千歳空港とを結ぶ交通の要衝であることから近年、宅地造成がなされ、札幌近郊の田園都市として発展しています。

旧有備館内部には、開拓の歴史をリアルに再現した版画（小野寺 榮 氏作）が展示されています。

市長コラム 天・地・人（てん・ち・じん）

時空への挑み

このたび、悠久の時を体験するような機会に臨みました。

一つは、当別町百四十年記念式典への祝賀訪問です。

戊辰戦争に敗れた仙台藩岩出山伊達家一門は、新生の地を求めて当主伊達邦直公主従四十三戸百六十一人が、北海道当別に鍬（くわ）を入れて今年で百四十年。うっそうとした樹木や笹やぶを開墾、大雨ごとに氾濫する石狩川や当別川との過酷な闘いの開拓でした。この史実は、当別町出身の作家本庄睦男氏により執筆された長編小説「石狩川」や、東映映画「大地の侍」で世に紹介されております。

百四十年の時を経て、改めて開拓の歴史を心に刻み、両市町の絆を深めることを決意した訪問でした。

もう一つは、名古屋市で開催された生物多様性条約国会議への参加です。

「生物多様性」とは、生物が互いに網の目のようにつながっている状態が重要だという考えであり、一九九二年に条約が採択され「生物多様性の保全」「資源の持続的な利用」「遺伝資源から得られる利益の公平な配分」の三つを主要目的としています。

この会議の一環として開催された生物多様性国際自治体会議において、本市の豊かな里地・里山を生かしたバイオマスタウンへの取り組みや「生物多様性を育（はぐく）む農業」水田農業の新たな役割の事例を世界に発信してまいりました。

地球上に生命が誕生して二十億年。生物が陸上に上がって四億年。人類が誕生して四百万年。今、生物大絶滅時代。生物後発の人類が生物共生のために行動を起こす責任は重大。生物多様性の宝庫・大崎市の存在は大きい。

大崎市長 伊藤康志